

第3回 企画展示図録

万葉の風土と歌人

——ミヤコとヒナ——

石川文／新谷 秀夫／北 世 博／小澤 昭巳
佐々木敏雄／本郷 二郎

■協力者一覧 (敬称略)

青山開	朝日新聞社(株)	飛鳥園(株)
アリス(株)	石川文化事業財団お茶の水図書館	
井筒(株)	出光美術館	茨城県立歴史館
岩波書店(株)	小矢部市教育委員会	川口常孝
川本武司	九州歴史資料館	京都科学(株)
宮内庁正倉院事務所	国立歴史民俗博物館	小学館(株)
鈴木義之	高岡市教育委員会	高岡市立博物館
高津柿本神社	竹中製作所(株)	館野和己
玉若酢命神社	土井實	東京国立博物館
唐招提寺	富山県教育委員会	富山県民会館分館内山邸
奈良国立博物館	奈良国立文化財研究所	奈良史跡文化センター
奈良市都市計画課	奈良市文化財課	奈良市埋蔵文化財調査センター
奈良・日本地名学研究所	乃村工藝社(株)	パスコ(株) 奈良営業所
宝来社(株)	穂積和夫	八木書店(株)
薬師寺	安田建一	山中敏史
吉野由美	トーザワ(株)	

第3回企画展示図録

万葉の風土と歌人—ミヤコとヒナ—

平成8年7月 発行

(財)高岡市民文化振興事業団

編集 高岡市万葉歴史館

〒933-01 富山県高岡市伏木一宮1丁目11番11号

TEL 0766 (44) 5511 FAX 0766 (44) 7335

印刷 (株)モトヨシ美術印刷

〒933 高岡市石灘本町768

TEL 0766 (23) 3103 (代表)

第3回 企画展示図録

万葉の風土と歌人

——ミヤコとヒナ——



ご あ い さ つ

(財)高岡市民文化振興事業団 理事長 佐藤 孝志

高岡市と『万葉集』とのつながりは、万葉歌人であり、『万葉集』の編者ともされる大伴家持が、越中高岡の地に国守として赴任してきたことにはじまります。わずか5年間ではありますが、都と異なる越中の風物に接し、その感動は歌となって『万葉集』巻17・18・19に結実しています。家持の歌の多くが高岡で詠まれたこともあり、高岡市は全国でも有数の万葉故地に数えられています。

こうしたことから高岡市は、万葉の詩情あふれる文化都市をめざして、野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」や「万葉集全20巻朗唱の会」などの開催や万葉に関心の深い全国の人々との交流をはかるなど、万葉のふるさとづくりを推進しています。そのような活動の中核施設となっているのが、平成2年10月に開設した「高岡市万葉歴史館」であります。

第1回「東アジアの中の万葉集」・第2回「古代日本における中国文化の摂取」に引き続き、このたびは「万葉の風土と歌人—ミヤコとヒナ—」をテーマに、第3回企画展を開催いたします。四季のうつりかわりとそれにもなって千変万化する<風土>に心打たれた万葉歌人たちが、どのようにその風土と対峙し、その感動を作品に結実したかについて、ミヤコとヒナの対比を通して追究したものです。

この冊子は、これを契機に『万葉集』について楽しくわかりやすく学べるように心がけて作成したものです。一人でも多くの方が万葉世界に遊び、当館に親しんでいただけたら幸いに存じます。

最後に、展示にあたりましてご協力いただきました関係各位に、心よりお礼申し上げます。



緒 言

高岡市万葉歴史館 館長 大久間 喜一郎

高岡市万葉歴史館の企画展示がこのたび更新された。開館当初の展示テーマは「東アジアの中の万葉集」であった。そして満3年後に更新された展示テーマは「古代日本における中国文化の摂取」と名付けられた。両展示とも、古代アジアの中の日本の立場を意識しつつ、貴重な文化遺産としての『万葉集』に对外関係の角度から光を与えたものであった。

だが、こうした企画は『万葉集』そのものへ踏み込んだあとでもよかったと思われ、やや先物買いをした観もないではないが、世間にさきんじて発想された万葉歴史館の構想には、世の人々に与えるインパクトの上からも適切な企画であったといえよう。

さて、このたびの第3回企画展示のテーマは、万葉歴史館本来の使命に立ち戻って、大方の人々の期待に応えるべく、「万葉の風土と歌人ーミヤコとヒナー」に決定した。芭蕉がその俳論でいう「不易流行」の理論にあてはめれば、まさに不易にあたるテーマである。『万葉集』プロパーに関わる展示テーマの形はいく通りかを想定することができるが、ビジュアルなものが要求される展示という性格から、今回は風土との関連という視点で万葉歌と万葉歌人とを捉え、また為政者が時刻というものを支配体制の根幹としたというところから、漏刻の立体模型を設置した。いま風土および時の把握という2点を併せ見るときは、『万葉集』を時空の関係から捉えた展示ということもできる。





1.はじめに

わたしたちは、時代を離れて生きられないように、風土からも離れることはできない。『万葉集』にしても同じで、その歌の生まれた時代の中に戻してみるとともに、その歌の生まれた風土に置きなおしてみなければならない。

『伊勢物語』の昔男むかしのおとこや『源氏物語』の光源氏みづのりが、「ミヤコ」ではとうてい目にするのでできない「ヒナ」の景に目を瞞みはったように、『万葉集』の家持やかもちもまた、異質の風土越中えつちゅうにおいて、大和やまととは違った自然に目を向けつづけた。

古来日本人の詩情をそそったのは、日本列島の複雑多様な美しい地形や、そこで生きる動植物という自然そのものであり、さらには四季のうつりかわりとそれに伴い千変万化する景観であった。ただそれを文学の素材とした者が「都びと」であるため、「ヒナ」と「ミヤコ」、旅人と在地人といった対比という形となって表現される場合が多い。

山部赤人やまべのあかひとは、吉野の風土の美しさを直視し歌うだけではなく、観念の景をも重ね合わせる。高橋虫麻呂たかはしのむしまろは、東国の風土を描きながらそこに伝わる古俗こぞく伝承をも歌いあげる。また、大宰府だいざいふの歌人たちは、筑紫つくしという異郷にあって、家・妹などの故郷の景を幻視する。これら万葉歌人たちは、風土そのものをただちに文学作品に投影し、描写しているわけではない。

このような風土と歌人たちのかかわりを、柿本人麻呂かきのものひとまろや大伴家持おおとものやかもちなどの代表歌人を取り上げ、とくに「ミヤコ」とは異なる風土「ヒナ」において、それぞれの歌人がどのように「風土」たいどに対峙たいししていたかを中心に考えていきたい。

2. 飛鳥・奈良の都と大宮人

ますらをの 轡の音すなり
一日には 千度参りし
東の 大きな御門を 入りかてぬかも
ははいりかねることだ



梅原の 大宮仕へ 生れつくや
娘子がともは ともしきろかも



飛鳥・奈良の都と大宮人



6世紀末から8世紀末まで、都は飛鳥・藤原・平城へと転じた。その間に社会は部民制から官司制・律令制へと中央集権化を進め、政府に出仕する役人などの住む宮都はしだいに膨張した。都の万葉歌人たちの眼前にある自然は、人為的に作られたもので、またそこに展開したのは中国経由の国際色豊かな華やかな文化であった。そうした都は本質的に支配者のものであって、そこには優越感が漲っていた。



6世紀末から8世紀末まで、都は飛鳥・藤原・平城へと転じた。その間に社会は部民制から官司制・律令制へと中央集権化を進め、政府に出仕する役人などの住む宮都はしだいに膨張した。都の万葉歌人たちの眼前にある自然は、人為的に作られたもので、またそこに展開したのは中国経由の国際色豊かな華やかな文化であった。そうした都は本質的に支配者のものであって、そこには優越感が漲っていた。



上 平城宮朱雀門復原模型
都城を代表する壮麗で威厳にみちた建物で、宮の表玄関にあたる。瓦葺・礎石建ちの中国風建築に、朱や緑青などの彩色を施している。
(奈良国立文化財研究所蔵)

左左 隼人の楯
隼人は九州南部に居住した部族だが、都びとは彼らの習俗を畏怖した。隼人の声は吠声といい、邪神を遠ざける力があるとされた。この楯は隼人が使用したものだが、宮内の井戸枠に転用されていた。
(奈良国立文化財研究所蔵)

左右 鉾
この鉾は戈の機能を併せもっている。都の警備に使用したのか、儀礼用か。正倉院風の模造品である。

Ⅲ 藤原の 大宮仕へ 生れつくや
娘子がともは ともしきろかも
めたちは 羨ましいことだ
(巻一一五三)

Ⅳ 一日には 千度参りし
東の 大きな御門を 入りかてぬかも
ははいりかねることだ
(巻一一八六)

Ⅴ ますらをの 轡の音すなり
ものふの 大臣 楯立つらしも
ますらをの轡の音がする ものふの大臣たちが 楯を立てていているらしい
(巻一一七二)



平城京左京三条二坊六坪の庭園遺跡

五言。初春作宝楼にして置酒す。一首。
景は麗し金谷の室、年は開く積草の春。
松烟雙びて翠を吐き、桜柳分きて新しきことを含む。
嶺は高し闇雲の路、魚は驚く乱藻の浜。
激泉に舞袖を移せば、流声松筠に韵く。
〔懷風藻〕

▼石崇の金谷の宅にも匹敵すべきこの佐保楼の宅の風景はうるわしく、積草の池の如きこの佐保楼の林泉に初春の年はあけた。松も烟霞（もや）も相並んでともに翠の色を吐き、桜も柳も各自めいめい新しきを含む。嶺は暗い雲のかかった路に高くそびえ、魚は乱れてはえた藻の浜に跳ね上る。水の激する泉に舞の袖を移して行くと、泉の流声は松や筠に響いて聞こえる。（日本古典文学大系本）



左上 貴族の庭園

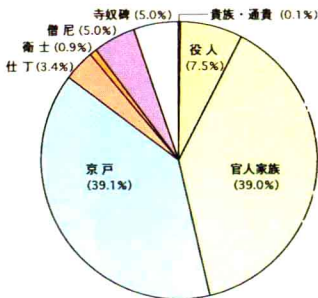
平城京左京三条二坊六坪にあった園池の址。人工の洲浜や屈曲した流水が見られ、『懷風藻』に描かれた中国人好みの庭園を髣髴させる。

（奈良史跡文化センター）

左下 画像鏡

東京都亀塚古墳から出土した後漢鏡である。その背面文様には東王父・西王母・靈獣などが見られ、中国の神仙思想の日本への流入ぶりが窺える。

（東京国立博物館蔵）



平城京の人口構成

平城京には20万人の人々が常時出入りしていた。貴族・官人とその家族、売買や官庁雑務に従事する京戸の比重が大きい、ほかに役民・神官・僧尼・奴隷などが居住していた。

国際的な意匠

薬師寺薬師三尊像の台座には、ギリシャ発祥の葡萄文、エジプトのロータス（蓮華）文、インドの邪鬼、中国の四神図・唐草文などが見られる。この台座はまさに当時の国際的意匠の粋を集めたものである。



薬師寺金堂薬師三尊像の台座北面（薬師寺蔵）



春日野の風景



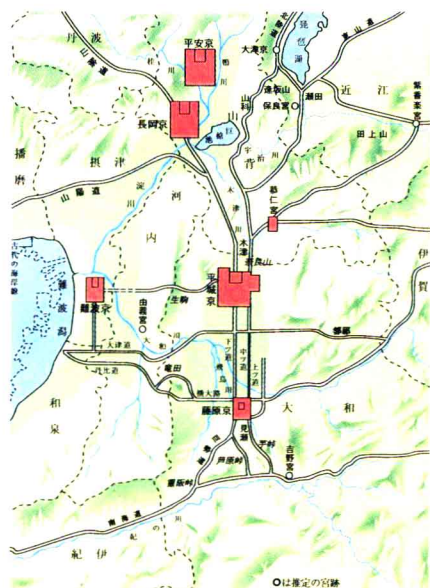
打毬の図（正倉院宝物）

Ⅲ 梅柳 過ぐらく惜しみ 佐保の内に 遊びしことを 宮もどろに

右、神亀四年正月、数の王子と諸の臣子等と、春日野に集ひて打毬の楽をなす。その日忽ちに天陰り雨かり雷電す。この時に、宮の中に侍従と侍衛となし。勅して刑罰に行なひ、皆授刀寮に散禁せしめ、妄りて道路に出づること得ざらしむ。ここに恒憤みし、即ちこの歌を作る。

▼梅や柳の見時の過ぎるのが惜しさに 佐保の内で
遊んだことを 宮廷もとどろくばかりに騒ぎ立て
ることよ

右は、神亀四年正月、多数の皇族や臣下の子弟たちが春日野に集まって、打毬の遊びを行った。その日急に空が曇って雨が降り雷が鳴り稲妻が光った。この時、宮中に侍従や舍人たちもいなかった。そこで勅命で処罰し、皆を授刀寮に閉じこめ、みだりに外出することを許さなかった。そこで心も晴れず、この歌を作ったのである。



奈良周辺における宮都の変遷

シルクロードの遺品

ギリシャ・ペルシャ・西域をとおり
いわゆるシルクロードをへて、隊商の
列が唐の都・長安へと向かう。その姿
はもはや目にできないが、たゆみない
活動の結果は、さらに海をこえて日本
にもたらされている。それが正倉院に
残っている種々の宝物である。地下に
埋もれなかったこれらの品々は、いま
もその輝きを失わない。

ここでは3点のガラス器を紹介す
る。いずれも正倉院宝物と同素材・同
製法による古代ガラス復原品である。

右の杯は紺琉璃杯で、7世紀のササ
ン朝ペルシャのものに類品がある。コ
バルト色のソーダ・ガラスの坏面に、
8個・8個・6個の環形ガラスを3段に
つけた流麗な作品である。



上 ^{りょく り} 緑琉璃十二曲長杯

8世紀の中国・唐時代の品と見られる。酸化鉄に特殊な
処理をして、鉛ガラスに透明感のある緑色をつけた。
縁の形を微妙に変化させ、杯の裏にはチューリップ・
兎のような植物・動物文をほどこした。片手で持ち、
一方のはしから酒を注ぎ、他方のはしから呑む。いわ
ゆる馬上杯である。

右 ^{はく り} 白琉璃碗

4～5世紀のペルシャ地域に多くの類例がある。透明な
ソーダ・ガラス製品で、上から18個の円文切子が4段カ
ットされ、その下方に7個の円文がある。最後に底面に
1個円形のカットを施した。なお、伝安閑天皇陵・新沢
千塚古墳からも、同意匠のカット・ガラスが出土して
いる。



遣唐使船

遣唐使は、630年（舒明天皇2）から894年（寛平6）にかけて、わが国から唐に派遣された国家使節である。遣使の目的は、第一に唐の整った行政制度・政治思想などを学びとり、ひいては国際的な地位を高めること。第二に、国際色豊かで進んだ文物を取り入れ、また交易の利をもとめることであった。遣唐使は264年間に19回任命されたが、そのうち実際に入唐したのは15回である。

遣唐使船は、古くは2隻で、奈良・平安時代には「四つの船」との異名をとったようにふつう4隻となった。乗船したのは、大使・副使・随員・従者・医師・陰陽師・通訳・技術者・船長・水手（水夫）の遣唐使一行で、ほかに留学生・留学僧も同船させていた。総人数は240人から500人ほどであったろう。

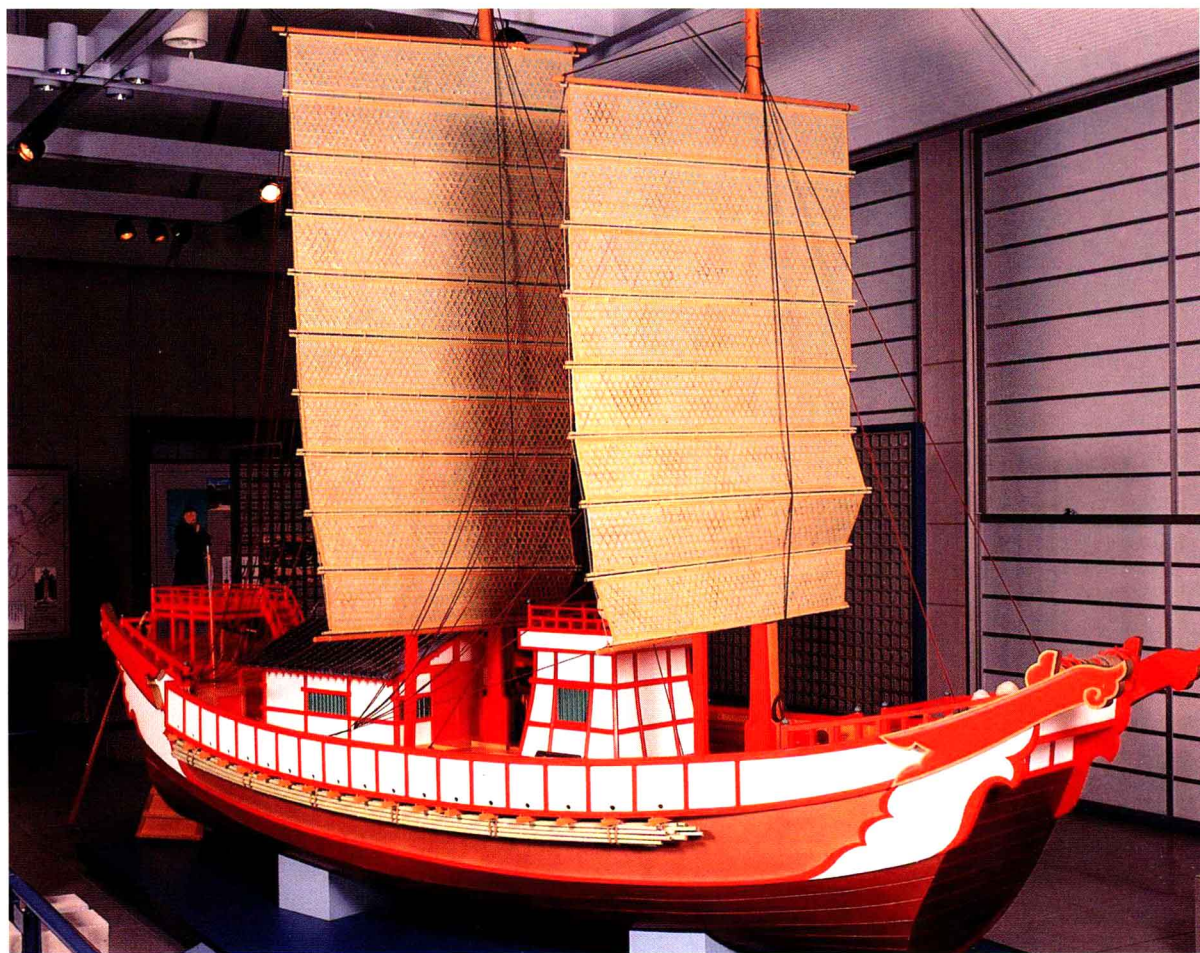
当初は朝鮮半島沿いを沿岸航法によって北上し、山東半島で上陸してから陸路を唐の都・長安に向かった。これを北路といい、ほぼ海難事故にあわない安全なルートだった。

しかし8世紀には新羅との関係が悪化し、九州地方の西北が南端から東シナ海を横断し、長江河口付近に上陸して

長安に赴くこととなった。この南路・南島路には危険が多かった。

遣唐使船は丸木舟から発展した形で、平底だったので波切りが悪かった。無風・逆風のときに帆は役立たず、多数の水手が櫓で漕いだ。これでは潮流に流される事故は防げない。しかも接合部がしっかりせず、海が荒れる中で分解することも珍しくなかった。船体構造・航法、それに気象予測の不備などもあって、ほぼ半数の船が遭難した。

こうした危険を顧みず、つぎつぎと使節が送り込まれた。使節には、容姿がよくまた儀礼を弁えた、優秀な貴族・官人が選ばれた。また留学生・留学僧にも、当時傑出しているとされた人材が選抜された。入唐経験者の中には、玄奘・吉備真備など唐で名声を博した者、阿倍仲麻呂のように中国皇帝に重用される者も出た。もちろん帰国後わが国の政治史・文化史に名を残した人物も多く、もたらされた文物も文化の向上に大きな貢献をした。また遣唐使の帰国の時に伴ってきた渡来人、とくに鑑真・菩提僊那などの活躍は忘れられない。



3. 吉野と宮廷歌人たち

[illegible]

万葉に歌われた時代、日本の文化・政治の中心は奈良盆地であった。その南に位置する「吉野」は、古来さまざまな形で歴史の表舞台に登場する。楠人麻呂によって「見れど飽かぬ」と讃美されたこの吉野は、古代において「聖地」として受けとめられていたようだ。おもに「幸ひといふ場」において歌われてきた吉野という奥土、宮廷歌人たちによって多様な彩りを示す。とくに山部赤人の歌う吉野は、私たちの目の前に美しく広がる。

吉野と宮廷歌人たち

み吉野の 象山のまの 木末には
こゝだも騒く 鳥の声かも
ぬばたまの 夜のふけゆけば
久木生ふる 清き川原に 千鳥しづ

宮は たたなづく 郡里もり 川なみの
清き河内ぞ 春へには 花散とをり 秋さ
れば 霧立ち渡る その山の いやますます
に この川の 絶ゆることなく ももしきの
大宮人は 常に通はむ



Copyright © 2007 John Wiley & Sons, Ltd.

「政治經濟學」與「社會主義的經濟學」之區別在於對經濟學之定義上。政治經濟學之定義為「研究人與財的分配」。而政治經濟學之定義為「研究社會生產之條件」。社會主義的經濟學之定義為「研究社會生產之條件」。社會主義的經濟學之定義為「研究社會生產之條件」。



● 日本から視野への韓国

万葉に歌われた時代、日本の文化・政治の中心は奈良盆地であった。その南に位置する「吉野」は、古来さまざまな形で歴史の表舞台に登場する。柿本人麻呂によって「見れど飽かぬ」と讃美されたこの吉野は、古代において「聖地」として受けとめられていたようだ。おもに行幸という場において歌われてきた吉野という風土は、宮廷歌人たちによって多様な彩りを示す。とくに山部赤人の歌う吉野は、私たちの目の前に美しく広がるのである。

山川も依りて仕ふる神ながら
たぎつ河内に舟出せすかも

吉野の風土

いっぽんに吉野といえば、桜の名所や南朝の本拠地としての吉野山を思い浮かべる場合が多い。しかし、『万葉集』などに歌われる古代の吉野はむしろ、吉野川流域を中心とする地域を指していたと思われる。

持統天皇による計32回を筆頭とする吉野行幸の地「吉野離宮」の所在地について、従来さまざまに議論されてきた。最近は、この写真にある「宮菴」みやうま 近辺にあったとするのが有力である。象山・象の小川・三船山などの万葉の故地も近辺に点在するこのあたりこそ、地形・景観・情趣ともに、古代における吉野の風土を如実に示す場所としてふさわしい。

壬申の乱前後の天武天皇をはじめとして、柿本人麻呂や、山部赤人・笠金村などの奈良時代初期の宮廷歌人たちの歌いあげた吉野の風土は、今もなおその美しさをもって私たちの眼前に広がっている。



吉野宮滝付近（鈴木義之氏撮影）

現在吉野へ入るには、近鉄吉野線で橿原神宮前から飛鳥、下市口を経てというのが普通のコースである。しかし、おそらく古代では峠を越えて吉野へ歩み入ったのであろう。飛鳥からの峠越えにはいくつかの道があったようだが、もっとも一般的であったのは、飛鳥川を稲淵、栢森とさかのぼり、芋ヶ峠を越えて今の上市町あたりに出る道であったと考えられる。

古代の天皇たちの行幸もまた、この道筋をたどっていったのであろうか。山水に囲まれた一種の神仙境たる「吉野」は、いわば生命力の再生をうながす「タマフリ」の聖地であった。

面よき人の よしとよく見て よしと言ひし
吉野よく見よ よき人よく見 （巻一―27）

▶ 昔の良き人が よい所だとよく見て よいと言った
この吉野をよく見よ 今の良き人よく見るがよい

聖地吉野を「見る」ことを強く歌いあげた天武天皇もまた、おそらくこの道をたどって吉野入りしたのであろう。



飛鳥から吉野への順路

（前頁の写真とともに、朝日新聞社刊
『朝日百科 日本の歴史別冊
歴史を読みなおす③』より）

天皇	吉野行幸出発月	関係する万葉歌
天 武	679年（天武天皇8） 5月	天武天皇御製歌（巻一―27）
持 統	1 689年（持統天皇3） 1月	このころのいずれかの作か？ 柿本人麻呂の吉野讃歌 （巻一―36～39）
	2 同年 8月	
	3 690年（持統天皇4） 2月	
	4 同年 5月	
	5 同年 8月	
	6 同年 10月	
	7 同年 12月	
	8 691年（持統天皇5） 1月	
	9 同年 4月	
	10 同年 7月	
	11 同年 10月	
	12 692年（持統天皇6） 5月	
	13 同年 7月	
	14 同年 10月	
	15 693年（持統天皇7） 3月	
	16 同年 5月	
	17 同年 7月	
	18 同年 8月	
	19 同年 11月	
	20 694年（持統天皇8） 1月	
	21 同年 4月	
	22 同年 9月	
	23 695年（持統天皇9）閏2月	
	24 同年 3月	
	25 同年 6月	
	26 同年 8月	
	27 同年 12月	
	28 696年（持統天皇10） 2月	
	29 同年 4月	
	30 同年 6月	
	31 697年（持統天皇11） 4月	
	32 701年（大 宝 元） 6月	高市黒人の吉野作歌（巻一―70）
文 武	701年（大 宝 元） 2月	文武天皇御製歌（巻一―74）
	702年（大 宝 2） 7月	
元 正	723年（養 老 7） 5月	笠金村（巻六―907～912）車持千年（913～916）
聖 武	724年（神 亀 元） 3月	大伴旅人（巻三―315～316）
	725年（神 亀 2） 5月	笠金村（巻六―920～922）山部赤人（923～927）
	736年（天 平 8） 6月	山部赤人（巻六―1005～1006）

歴代吉野行幸表

吉野行幸と万葉歌

『古事記』には雄略天皇の吉野行幸が記されているが、神仙思想が色濃く現れた伝承的な部分が多い。史実に近いと思われる記録としては、斉明天皇による行幸<659年（斉明天皇5）>が『日本書紀』に記されているのが、初見であろう。

しかし、壬申の乱勝利後の天武天皇による行幸以降、吉野行幸の回数は多くなる。とくに持統天皇が計32回という数を誇るのだが、平城京遷都時の元明天皇をのぞくと、聖武天皇まで代々の天皇が吉野入りを果たしている。

天武・持統系の天皇にとって、吉野という地は特別なものとして意識されていたらしい。それはおそらく天武天皇ゆかりの地であることにとどまらず、皇位継承のための国家統治力を身につける「タマフリの聖地」として意義深い土地であったと考えられる。

さて、この吉野行幸という場は『万葉集』に多くの歌を残させることとなった。持統天皇行幸時の柿本人麻呂、元正天皇の時の笠金村・車持千年、さらには聖武天皇の場合の山部赤人・など、万葉の宮廷歌人たちがそれぞれにすばらしい「吉野讃歌」を歌いあげている。

人麻呂の吉野讃歌

柿本人麻呂が残した吉野讃歌は2群からなる。第1歌群で人麻呂は「大宮人」の舟遊びのさまを歌い、全体ではく山一川>の対句で統一しながら、吉野という風土を「見れど飽かぬ」ものとして歌いあげる。

左にあげた歌は、それに続く第2歌群である。ここで人麻呂は、吉野において「国見」する天皇の姿と、その天皇に「依りて仕ふる」山川のさまを詠む。天皇が現人神として君臨し自然神より優位に立つように考えられ出したこのころ、人麻呂はその意識を具体的に詠むことで、天皇の権力の強大さを讃えているのである。

おそらく持統天皇のたび重なる吉野行幸の最初のころに詠まれたこの吉野讃歌において、人麻呂は吉野の風土そのものを直接的に歌っていない。人麻呂にとっての「見れど飽かぬ」吉野とは、吉野の美しい自然そのものではなく、むしろその美しい吉野という自然を支配する天皇統治の世界、それが「見れど飽かぬ」ものだったのだ。



宇喜多一画「山部赤人図」

Ⅲ

吉野宮に幸す時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌
 やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせずと
 吉野川 たぎつ河内に 高殿を 高知りまして
 登り立ち 国見をせせば
 たたなはる 青垣山 やまつみの 奉る御調と
 春へには 花かざし持ち 秋立ては 黄葉かざせり
 行き沿ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉る
 上つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に 小網さし渡す
 山川も 依りて仕ふる 神の御代かも
 反歌
 山川も 依りて仕ふる 神ながら
 たぎつ河内に 舟出せずかも

(巻一三八～三九)

吉野宮に行幸された時に、柿本朝臣人麻呂が作った歌
 (やすみしし) わが大君が 神であるまに 神らしくふるまわれるべく
 吉野川の 渦巻き流れる谷間に 高殿を 高々と建てられて
 登り立ち 国見をなさると
 幾重にも重なった 青垣山は 山の神が 捧げる貢物はこれですと
 春のころは 頂に花を飾り 秋になると 色づいた黄葉を飾っている
 御殿に沿って流れる 川の神も お食事に 奉仕しよう
 上の瀬で 鵜川狩を催し 下の瀬に 小網を張り構える
 山や川の神までも このように心服して仕えるさまは これが神代というものであろうか
 反歌
 山川の神も 心服して仕える 神であるまに
 渦巻き流れる谷間で 舟遊びをなさることだ

山部赤人のひと

山部赤人は、奈良前期の官人で、万葉第3期の代表歌人のひとりである。

『万葉集』には50首の歌を残しているが、他の史料にはまったく現れない人物である。行幸従駕のおりに詠んだ歌が多く、おそらく宮廷歌人として華やかに活動していたと考えられている。

こきん

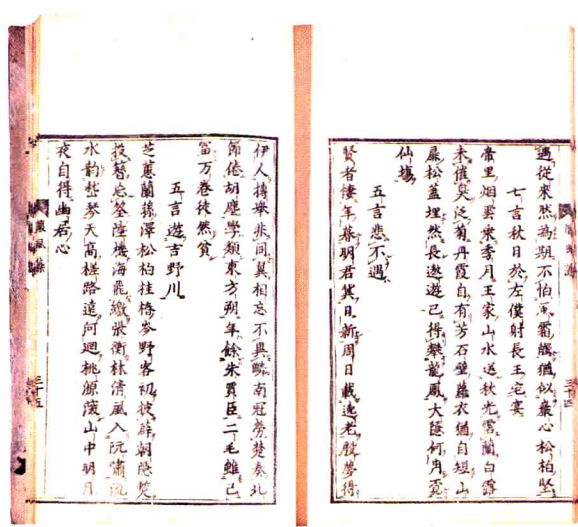
きのつらばき

かきのものひとまろ

『古今集』の仮名序で紀貫之は山部赤人を柿本人麻呂と並称したが、その平明で端正な歌風と、叙景歌人としての評価は、近代にはじまるといえる。

751年（天平勝宝3）に成立した漢詩集『懷風藻』にも吉野はあらわれる。全120編の1割を越える漢詩に取り上げられた吉野は、「神仙郷」のイメージが色濃い。写真にある藤原宇合の詩にも「天高くて棧路遠く、河廻りて桃源深し」として吉野の地が詠まれている。

和歌において天皇と結びついた吉野の自然は、漢詩の世界において神仙思想と結びつくが、まったくかけ離れてはいない。『懷風藻』の吉野詩もまた、天皇の行幸従駕の作が多いのである。



『懷風藻』

赤人の吉野讃歌

赤人の吉野讃歌は人麻呂と同じ2群からなる。第2歌群（巻六・926・927）は、吉野における天皇の狩猟の様子を歌うことで天皇讃美の歌となっている。それに対し、下にあげた第1歌群は、吉野の風土を「見る」ことはない。「見れど飽かぬ」ものとして歌われた吉野は、人麻呂にとって天皇を讃美する手段にすぎなかった。その吉野に対し、赤人は「常に通はむ」大宮人のひとりとして対峙する。人麻呂の伝統を踏襲しながらも、赤人は吉野の自然そのものを大いに歌いあげたのだ。これはそれぞれの歌人の個性の問題だけではなく、時代の変化によって吉野行幸の果たす意義が変わってきたことにも関わるようだ。「見れど飽かぬ」と歌われてきた吉野は、赤人によってはじめてその風土が歌の対象となったのである。

山部宿禰赤人の作る歌
やすみしし わご大君の 高知らす 吉野の宮は
たたなづく 青垣ごもり 川なみの 清き河内ぞ
春へには 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る
その山の いやますますに この川の 絶ゆることなく
もししきの 大宮人は 常に通はむ
反歌二首
み吉野の 象山のまの 木末には
こことも騒ぐ 鳥の声かも
ぬはたまの 夜のふけゆけば 久木生ふる
清き川原に 千鳥しば鳴く
（巻八・九三三・九三五）
山部宿禰赤人の作った歌
（やすみしし） わが大君が 高々と造られた 吉野の宮は
かさなる 青垣山に囲まれ 川の流れの 清い河内だ
春ともなれば 花が咲き乱れ 秋ともなれば 霧が立ち渡る
あの山のように なお続き この川のように 絶えることがなく
（もししきの） 大宮人は いつも行き通うであらう
反歌二首
み吉野の 象山の谷間の 梢には
いっぱい鳴き騒ぐ 鳥の声だ
（ぬはたまの） 夜がふけてゆくと 久木の生い茂る
清い川原に 千鳥がしきりに鳴く